

研究発表もうしこみフォーム

氏名：富田敬大

氏名のローマ字表記：Tomita Takahiro

所属：立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構

専門分野：文化人類学

発表のタイトル：社会主義モンゴルにおける寒雪害（ゾド）の影響と対応

発表要旨（600字～800字程度）：

本発表では、モンゴル人民共和国において進められた牧畜の産業化と、人びとの寒雪害（ゾド）に対する認識およびその対応との関係について、農牧業協同組合（ネグデル）のもとでの家畜生産とゾド被害に着目して検討する。

1950年代末に牧畜の集団化が完了し、家畜生産のさらなる拡大が、国内外で強く求められるなかで、1960年代に相次いだゾドは、経済成長を阻害する最大の要因とみなされた。社会主義時代のモンゴルでは、ゾドの発生原因として気象的要因と人為的要因を区別し、後者をより重視した。つまり、ゾドが人や家畜に及ぼす害（＝災害）は不可避なものではなく、牧畜業従事者が適切な対策をとることで、危機的な自然現象を克服できるとされた。実際に、協同組合体制のもと、ゾドの猛威に対処対応する知識や技術、制度が生み出され、それらが干ばつやゾドの被害の低減に寄与してきた。

しかし、ゾドによる被害を完全になくすことは難しく、県あるいは郡単位で見ればゾドはたびたび発生し、地方の家畜生産に深刻な影響を及ぼした。ゾドの発生により未成熟な個体を中心に家畜の死亡率が上昇するとともに、不妊や流産が増加し家畜の出生率が低下するため、自然増加率は平年に比べて大きく減少した。

また、ゾドの被害と家畜調達の関係に着目することで、ゾドをめぐる地域社会と国家や地方行政との結びつきに、救援や回復といったポジティブな側面だけでなく、脆弱性を高めるネガティブな側面があったことが明らかになった。国内外の都市消費者による食肉需要の増加に伴って、ヒツジ・ヤギ・ウシのメスと未成熟な個体が多い構成になっていたことが、ゾド発生時に自然増加率の大幅な減少（家畜の死亡率の上昇とメスの不妊・流産のリスクの増大）を招いた。さらに、ゾド被害からの回復が十分ではない状況で行われた過剰な国家調達が、ゾド被害からの回復を鈍らせ、家畜頭数の減少・停滞をもたらす一因となったと考えられる。